

金婚冠婚きんこんかんこん (結婚五〇周年)

キンコンカンコン

金婚冠婚

どこからともなく鐘の音が僕の体中に沁み渡る

僕らが結婚式を挙げてもう五〇年になる

所謂「金婚式」だ

五〇年と言ったら、「世紀の半分、歴史だってかなり変わる

少し前に、

若くして離婚した女性の教え子が

「凄い、信じられない、同じ人と何十年も一緒に居るなんて」と

眩くのを聞いた

「気持悪い」という表現も覚悟していたが
僕は平然としていた

その結婚五〇周年が巡って来た

俗に目出度いと世間では祝う「金婚式」が、

どう目出度いか証明したくなる時代になった

いや、証明が不要な時代になったというべきか

金でも銀でもどうでも良くなったのかもしれない

でも実際にやってみて、別れるエネルギーとは違う

かっこ悪いが、微笑ましい底力は見えるようになった

僕は、三五年間若者相手に「教員」だけをやった来た

でも「道楽」のように仕事をしたし、その想い出は今
でも艶々している

かっこ悪い僕の傍にずっと居てくれる人なんて居ない
と思っていた

気難しい男の傍に、生涯付き添っている女性なんて

想像もしていなかった

それでも僕は結婚した

気儘な教師には、気儘な教え子が寄って来た

どっちが訪れ、どっちが受け容れたのか知らないが

明日ばかりを見詰めて

旗を立て、陣を固めた

我が家も隠れ家の一つになった

かみさんも、教え子も同志になった

時には自分の家も雑魚寝の場になり

かみさんは飲み過ぎた教え子の嘔吐の世話まで見てくれた

うちにはカッコ悪い「革命」や「反戦」が満ち溢れていた

若さがギラギラと懐疑の光を漂わせていた

うちの彼女には我儘な所もあったけれど、

成り行きによつては極めて無欲にもなった

「姐ご」のような気風（キップ）の良さも最高だったし
小さな事にも僕より遥かに見事であった

彼女が見せる筆遣いとともに切れが良かったし
墨の黒さが信じられた

僕の甘っちょろい変革意識も恋愛感覚も

次第に、暗く重く変わってきた

隣に寝ているかみさんの空間にも

今日一日大変だったのだろうという

労わりを誘う何かが見えて来たし

僕の突っ張った肩も

気張らない戦友意識に変わってきた

はだけた布団をかけてやる気持が

森の匂いのように

見えなかった世界へと誘って行った

霧の中に愛の見極めの道標がゆらりと見え始めた

キンコンカンと鐘が鳴るうちに

五〇年も時間が走った

「後期高齢者」という忌まわしい言葉が自分の存在定

義となり

彼女も確実に50歳を隔てつつ、歩いて来る

今「幸せは♡」と問われれば、今まで半世紀を共に出来たことと

答える自分が微笑ましい いじらしくもある

息子たちも懸命に生きている

懸命にならなければ生きて行けない

そういう時代に、親も子も生きている

若い人たちは、これだけ「増産」された高齢者を

斜めに見詰めながら、自分でも気付かずに

新しい形の侵略戦争にすり寄っているのかもしれない

しかし僕は

悲惨な「地獄」である戦争の再来を拒絶して

不在かもしれない「人間性」にしがみ付きながら生きていこうと

せめて

傍にいる人だけにでも優しくしようと

一日一日を歩いている

遠くで燃え盛る煉獄を呪いながら

形だけでも平和な「今」を

とぼとぼと歩いている

霧の広がる泥沼に至るやも知れぬ道を避け、避け

一歩一歩と歩みを運び続ける

残り少ない鉄錆色の道を

湿った空気の中、それでも、金婚冠婚キンコンカン
ンと

少年時代に「鐘のなる丘」で鳴ったのと同じ音色で
体中に響き渡って来る

心の奥深く沼地の畔に立つ天主堂の

打ち砕かれた天井から降り下る雪のように

(2013.11.12 健)